

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The "Japan" Left Behind in Micronesia (ESSAYS : LIVING ON A SOUTH PACIFIC ISLAND)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008388



ミクロネシア・ファイス島北岸に今も残る
燐鉱石積み出し用鉄塔に登って遊ぶ子どもたち

ミクロネシアに遺された「日本」

太平洋の島々では、日本人が忘れかけたものに会うことがある。
貴重な遺跡や考古学的資料の間に埋もれつつある「置き去りにされた日本」を
外交土壌としていくためには……

印東道子
国立民族学博物館教授

八〇年の時を超えて現れた ミクロネシア

昨年、ある写真集を出版した。ミクロネシアで戦前に撮影された人類学的な写真である。

日本がミクロネシアを占領した翌年の一九一五年に、東京帝国大学の人類学者が三名（長谷部言人、松村瞭、柴田常恵）、ミクロネシアへと派遣された。海軍の船で各地を回った三人は、まだほとんど西欧化していない風景や人々の伝統的な暮らしぶりなど、貴重な写真資料をガラス乾板上に記録して帰国した。

その後、このガラス乾板は、東京大学総合研究博物館に保管されてきたが、利用する人もなく、保存ケースの中で八〇年以上も眠り続けてきた。幸い、同博物館の赤澤威教授（現国際日本文化研究センター教授）からこれらの整理を依頼されたのを機に、日英二カ国語の解説をつけて出版することができた（同博物館標本資料報告第三十四号）。

三〇〇点を超える写真資料のなかから、主として人物像を中心に一〇〇点を選んだが、どれも鮮明に写っているので選ぶのに苦労した。同じミクロネシアの島でありながら、顔の特徴、髪の手入れ、服装、装身



印東 道子

いんとう みちこ

東京女子大学史学科卒業。同大学助手を経て1981～88年ニュージーランド・オタゴ大学大学院へ留学。オセアニアの考古学研究で人類学修士号およびPh.D.取得。1988年北海道東海大学国際文化学部助教授、1996年より同大学教授、2000年4月より現職。ミクロネシアの島々で十数回の発掘調査を行なっている。主な共編著に『オセアニア1：島嶼に生きる』『世界を掘る』『モンゴロイドの道』『生活技術の人類学』『フィールドワークを歩く』『オーストロネシアの民族生物学』『東京大学総合研究博物館所蔵ミクロネシア古写真資料カタログ』などがある。

具の種類など、それぞれに違う特徴が写しこまれている。また、家族ごとに写した写真や、現在では破壊されてしまった遺跡の写真も含まれており、今世紀初頭のミクロネシアの姿を復元する貴重な資料である。今回の写真集出版は、海外、特にミクロネシアからの反響が大きかったことで、所期の目的はかなり達せられた。というのは、

日本統治時代にミクロネシアで行なわれた多様な調査研究は、主として日本語で出版されたため、当事者であるミクロネシアの人々や海外の研究者にとっては利用しづらく、空白の三〇年になってきたという背景がある。少なくとも、現在、日本国内にある未発表の資料や日本語で発表された戦前の報告などは、少しずつでも世界、特に当事国に向けて英語で公開することが、われわれ日本人に残された課題だと思うからである。

「戦時の」日本が今も息づく

一考古学者にすぎない筆者が、このような考えを抱くようになったのは、フィールドにしているミクロネシアで見聞きする戦前、戦中の「日本」の存在が、今でも生々しいものだからである。ミクロネシアの人々にとって、日本との三〇年間に及ぶ社会的・文化的に密接な関係は（ミクロネシアから見れば、一方的な関係であったのだが……）、ある意味において、終戦によって断ち切られたまま、戦後を迎えきれていないと感じることが多い。

例えば考古学調査をする場合、まずそれぞれの島には遺跡がどのように分布しているかを調査するが、その際、ほとんど例外なく戦時中の日本の痕跡が見つかる。

マリアナ諸島のロタ島には、今でも空を仰いでいる機関砲やトーチカなどが放置されており、ヤップ島では、旧飛行場のすぐわきに日本の小型戦闘機が二機、雨ざらしになっている。トラック（現チューク）環礁のラグーンには日本の艦船や商船などが多数沈んでおり、現在はダイバーたちの格好の目標となっている。また、トラックの南方のモートロック環礁で調査した際にも、小さな戦車が数台、置き去りにされており、こんなに離れた小さなサンゴ島にまで戦車を運んでくる必要があったのかと、たいへん驚いた記憶がある。パラオのペリリュー島で発掘した大きな貝塚では、大小の葉莢も多数掘り出され、いつ不発弾を掘り当ててもおかしくない、今思えば危険な状況だった。トーチカなど、戦後世代の筆者にとっては耳新しい用語であったが、錆びた鉄釜と飯盒を、ロタ島のやぶのなかで見つけた時には、さすがに胸に迫るものがあつた。

このように、ミクロネシアの人々は、「戦時の日本」を身近に感じながら日常的に暮らしている。島の若者には、戦争時代へのこだわりはほとんどない。一方、日本語教育を受けた年配の世代からも、戦時中の話はあまり聞かれない。せいぜい「日本の兵隊さんと一緒に戦った、とっても怖かった」

パラオ・ペリリュー島の大貝塚発掘作業。不発弾もかなり埋まっている



と話す程度である。

日本統治時代の異文化体験と「置き去りにされた日本」

戦争に関しては口の重い彼らも、戦前の日本統治時代については、わりと雄弁に語ってくれる。「日本時代には、軒先がアーケード状に連なっていて、ここからあそこまで濡れないで歩けた」店には何でも売っていた「朝から晩まで日本人と一緒に畑で仕事をした」など、戦争前の数十年間を懐かしむ老人は多い。彼らの記憶における日本との関わりは、戦前から戦中へと一体化しているようである。

農業試験場では、それまで見たこともなかった野菜が栽培され、土地改良のための肥料の工夫、カツオ船に乗って遠洋航海する機会、すべての子どもへの日本語による教育と、できのよい者へは木工学校で建築技術を学ぶ機会が与えられるなど、ミクロネシア各地で行なわれた拓殖・教育事業は、彼らにとってはまさに大規模な異文化体験であった。

日本時代にはさまざまな設備も整備され

た。以前、ロタ島のインフォーマントから聞いて、妙に感動した話がある。ロタには島の中央高地に、地下水が豊富に湧き出る水源地と呼ばれた場所があり、日本時代にそこから麓の村までパイプを引いたので、戦後も便利に使い続けられてきた。ところがアメリカ統治時代に、使った水に対して課税することが検討され始め、それを理不尽に思った村人は、「税金を課すというなら払おう。ただし、払う相手はこのパイプシステムを造ってくれた日本人だ」と対抗したので、ついにその課税の話はいったん見送られたという。

このように日本時代の多くの構築物は、たとえそれが日本人のために造られたとしても、島人の生活にも直接恩恵を与えるものでもあった。日本時代に施設された滑走路は、現在でも補修して使用しているし、ファイスなどサンゴ島では、コンクリート製の貯水タンクに、今でも雨水を蓄えている。

その一方では、島民から搾取したのもあった。燐鉱石産業がその好例である。

一九九一年からファイス島で調査を行な

っているが、この島では燐鉱石の採掘が一
九三七年から七年間行なわれた。燐鉱石を
積んだトラックが走ったレールの錆びた断
片が、遺跡周辺にも散在しているし、燐鉱
石を乾燥させるための巨大な鉄の乾燥シリ
ンダーが二基、まだ使えるかのように並ん
でいる。積み出し用のクレーンが設置され
ていた崖には、鉄の柱が立ち、沖に停泊し
た運搬船との間を往復する舢に、燐鉱石を
積みこんでいた様子が目に浮かぶ。

燐鉱石を掘り尽くしたあとには、むき出
しになった岩盤が島の中央部に荒涼と広が
っている。その上には土壌は堆積せず、植
物は何も育たない。自分たちの土地である
けれども、もう元どおりにはならない。こ
こにも「日本」が置き去りにされている。

豊かな外交土壌を生かして 本当の「戦後」へ

この置き去りにされた「日本」を片付け
ることは難しい。しかし、善きも悪しきも
すべてを受けとめ、両国のこれからの関係
を築くための滋養豊かな「外交土壌」とみ
なせばよいではないか。それには、突然終

わった両国の関係を、いったん、両者が納
得する形で終結すべきかもしれない。

現代の日本の大学生にミクロネシアのビ
デオを見せると、島の年配の人が日本語を
話すのを見て驚く。日本による統治時代の
存在すら、学ぶ機会を持たないのが現状で
ある。

戦後、ミクロネシア各地で遺族や戦友ら
によって、遺骨収集や慰霊塔建立が続けら
れてきた。これはある意味において、残さ
れた彼ら自身が戦後を迎えるために行なっ
ものである。しかし、このような行為は、
一方的なものになってはならない。ある島
では、遺骨収集団が、島人の古い墓もブル
ドーザーで掘り崩し、現地の文化財保護委
員会から抗議された。ミクロネシアの人々
は、戦争当事者と同じくらい被害を被った
犠牲者なのである。自分たちの生まれた島
が戦場となり、多くの犠牲を出した現地の
人々への配慮をこそ第一にしたいものでは
ある。

最近では、若い世代が青年海外協力隊など
で世界各地に派遣されている。技術を教え
共に苦勞する人的存在を、島の人々も求め

ている。そして、彼ら・彼女らにこそ、ミ
クロネシアには日本との深い歴史的関係や、
そこで培われた豊かな「外交土壌」が残っ
ていることを知ってほしい。そして、この
世代が核になって両国の新たな関係を築く
ことができれば、ミクロネシアの人々が日
本を見る目も「戦後」へと移り変わってゆ
くのだと思う。

G



ミクロネシア・モートロック諸島に残された戦車の残骸